

強者の戦略

こんにちは。日本史の岡上です。「東大日本史のみかた」も7年目に入りました。今年も最新の東大の入試問題を題材にお話をしていきたいと思っています。

さて、みなさん、1週間ほど時間がありました、どのような解答が仕上がったのでしょうか？今回取り上げた東大日本史の第1問は古代からの出題で「神仏習合」をテーマにした問題でした。政治や制度、外交などが多く問われていた第1問の古代史において、久しぶりの文化史からの出題でしたね。

それでは解説を始めていきましょう。

<神と仏の共存>

設問

A 在来の神々への信仰と伝来した仏教との間には違いがあったにもかかわらず、両者の共存が可能となった理由について、2行以内で述べなさい。

設問Aのテーマは「在来の神々への信仰と伝来した仏教との共存が可能となった理由」。「違いがあったにもかかわらず」共存できたのは、その両者に似通ったもの、もしくは相互に受容できる素地があったからと考えられます。

両者の共存の過程については資料文(1)～(3)で述べられていますので、順番にみていきましょう。

(1) 大和国の大神神社では、神体である三輪山が祭りの対象となり、のちに山麓に建てられた社殿は礼拝のための施設と考えられている。

ここでは大和国の大神神社について言及されています。まず「神体である三輪山が祭りの対象となり」という表現から、**在来の神々への信仰とは、アニミズム（あらゆる自然物や自然現象に霊威が存在するという考え）であり、自然崇拝（大神神社の場合は三輪山への崇拝）が根本にある**ことが読み取れます。また「のちに山麓に建てられた社殿は礼拝のための施設」という表現から、元来、社殿は設けられず、礼拝の教義などものちに加えられたものであることが分かります。問題の冒頭には「日本列島に仏教が伝わると、在来の神々への信仰もいろいろな影響を受けることとなった」とありますので、社殿の設置や礼拝の教義などは、仏教の影響の一端とも考えられますね。

※ちなみに大神神社のホームページには、以下のような説明がされていました。

強者の戦略

ご祭神の大物主大神（おおものぬしのおおかみ）がお山に鎮まるために、古来本殿は設けずに拝殿の奥にある三ツ鳥居を通し三輪山を拝するという原初の神祀りの様を伝える我が国最古の神社です。

ご神体が三輪山であること、古来本殿は設けられていなかったことが、しっかりと書かれていました。

次に資料文(2)です。

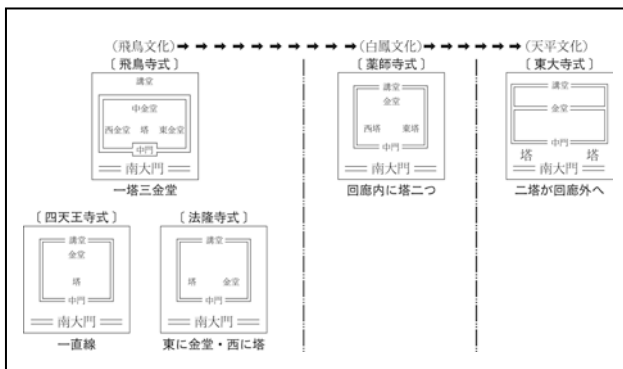
(2) 飛鳥寺の塔の下には、勾玉や武具など、古墳の副葬品と同様の品々が埋納されていた。

「飛鳥寺の塔の下」に「勾玉や武具など、古墳の副葬品と同様の品々」が埋納されていたとあります。これはどんな意味を持つのでしょうか。ここで寺院における「塔」の役割について確認しておきましょう。

寺院は基本的に「金堂」と「塔」から構成され、それぞれに役割があります。「金堂」は仏像を安置するものあり、「塔」は仏舎利（釈迦の遺骨）を安置するものです。

※ちなみに「金堂」と「塔」の配置をたどることで、仏教の変遷を考えることができます。

<伽藍配置の変遷>



まず、日本最初の本格的な寺院とされる飛鳥寺は、「一塔三金堂」といって中心の塔を3つの金堂が取り囲むような伽藍配置をしています。ここから当初の仏教においては「塔」が中心であった、すなわち「仏舎利」が信仰の中心であったことが分かります。その傾向は、四天王寺にもみられ、やはり寺院の中心に「塔」が配されています。しかし、しばらくすると法隆寺のような「塔」と「金堂」が東西に並列する寺院が現れ、さらには薬師寺・東大寺のように「金堂」を中心とする伽藍配置へと変わっていきます。日本における仏教が「仏舎利」中心の信仰から「仏像」中心の信仰へと変化していったのです。

つまり、仏舎利を納める塔の下に「古墳の副葬品と同様の品々」が埋納されていたことは、**当時の人々が古墳における葬送儀礼（＝在来の神々への信仰）と仏舎利への信仰（＝仏教）を同様のものと認識し、受容していた**ということになります。

※『詳説日本史』（山川出版社）にも、飛鳥寺の注釈部分に、

飛鳥寺の発掘調査では、塔の心礎から古墳の副葬品と同種の品が出土し、在来の信仰と習合する形で仏教が導入されたことが知られた。

とあり、在来の神々への信仰が伝来した仏教と共存していったことが述べられています。

では何故、当時の人々は古墳における葬送儀礼と仏舎利への信仰を同様のものと認識し、受容できたのでしょうか。資料文(3)をみてみましょう。

(3) 藤原氏は、平城遷都にともない、奈良の地に氏寺である興福寺を建立するとともに、氏神である春日神を祭った。

ここでは藤原氏が興福寺（氏寺）を建立するとと

強者の戦略

もに、春日神（氏神）を祭ったとあります。まず、氏神とは氏の間には伝えられた祖先神や氏を守るとされた守護神のことですので、**今回取り上げる在来の神々への信仰には自然崇拝だけでなく、祖先神を祭ることも含まれている**ことが示されています。

一方、氏寺とは氏族の発展と先祖の追善を行う寺であり、この氏寺がもつ「先祖の追善を行う」という機能は、まさに古墳における葬送儀礼と同様のものであることが分かります。つまり、**在来の神々への信仰も仏教も「祖先を祭る」という同様の機能を有していた**からこそ、古墳の造営が氏寺の建立へと変化しながらも、両者は共存できたと考えられるのです。

以上をまとめて、解答を作成してみましょう。

【解答例】

A 在来の神々への信仰は、自然崇拝や祖先神を祭るものであったが、仏教も同様に先祖を祭る機能を有していたために受容された。(59 字)

<神仏習合の展開>

設問

B 奈良時代から平安時代前期にかけて、神々への信仰は仏教の影響を受けてどのように展開したのか、4行以内で述べなさい。

設問Bのテーマは「神々への信仰は仏教の影響を受けてどのように展開したのか」、つまり「神仏習合の展開」が問われています。これについては資料文(4)～(6)で言及されているので、順番に確認していきましょう。

まずは資料文(4)から。

(4) 奈良時代前期には、神社の境内に寺が営まれたり、神前で経巻を読む法会が行われたりするようになった。

資料文(4)では奈良時代前期のこととして、「神社の境内に寺が営まれ」(＝神宮寺の建立)、「神前で経巻を読む法会が行われ」(＝神前読経)とあり、**神仏習合の風潮が見られた**ことが指摘されています。

次に資料文(5)です。

(5) 平安時代前期になると、僧の姿をした八幡神の神像彫刻がつけられるようになった。

資料文(5)では平安時代前期のこととして、僧の姿をした八幡神の神像彫刻(＝僧形八幡神像)が作成されたとあります。本来、在来の神々は山や岩といった自然物に宿るもので、それ自身に実体のないものでした。それが偶像として作成されたのが神像彫刻です。ここには明らかに**仏像を中心とした信仰が盛んであった**仏教の影響がみられ、また**神々と仏は同体のものである**という発想もみられます。

最後に資料文(6)をみていきましょう。

強者の戦略

(6) 日本の神々は、仏が人々を救うためにこの世に仮に姿を現したものとする考えが、平安時代中期になると広まっていった。

資料文(6)では平安時代中期のこととして、「日本の神々は、仏が人々を救うためにこの世に仮に姿を現したものとする考え」(＝本地垂迹説)が広まっていったことが指摘されています。しかし、ここで気をつけなければならないのは、設問の時代設定は「奈良時代から平安時代前期」となっていることです。つまり、「本地垂迹説が広まった」と解答を締めくくることができません。では、資料文(6)をどのように解答に反映させればよいのでしょうか。

ここでは**平安時代前期に、中期以降に広まる本地垂迹説の基礎がつけられていった**事情を指摘できればいいのではないのでしょうか。すなわち、在来の神々への信仰は、本来的に体系的な教義はなかったわけですが、神仏習合が進み、神と仏を同体とする発想のなかで、仏教の体系的な教義が在来の神々への信仰にも影響を与えていきました。**平安時代前期に仏教の教義の影響によって在来の神々への信仰の体系化が行われたことは、平安時代中期における神々の個々に本地とされる仏が設定される本地垂迹説の広まりの基礎となった**のです。

では、以上をまとめて解答を作成してみましよう。

【解答例】

B奈良時代前期には神宮寺の建立や神前読経などが行われ、神仏習合の風潮がみられた。平安時代前期には、神と仏を同体とする発想で神像彫刻も作成された。また在来の神々への信仰が仏教の教義の影響を受けて体系化され、後の本地垂迹説の基礎がつけられた。(119字)

さて、みなさんの解答はいかがだったでしょうか？

論述問題の解答はもちろん一つではありませんので、「これはどうだろうか？」と自分では判断つかないものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。**この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってきてくださいね。**

それでは、今回はこの辺にいたしましょう。次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに！！